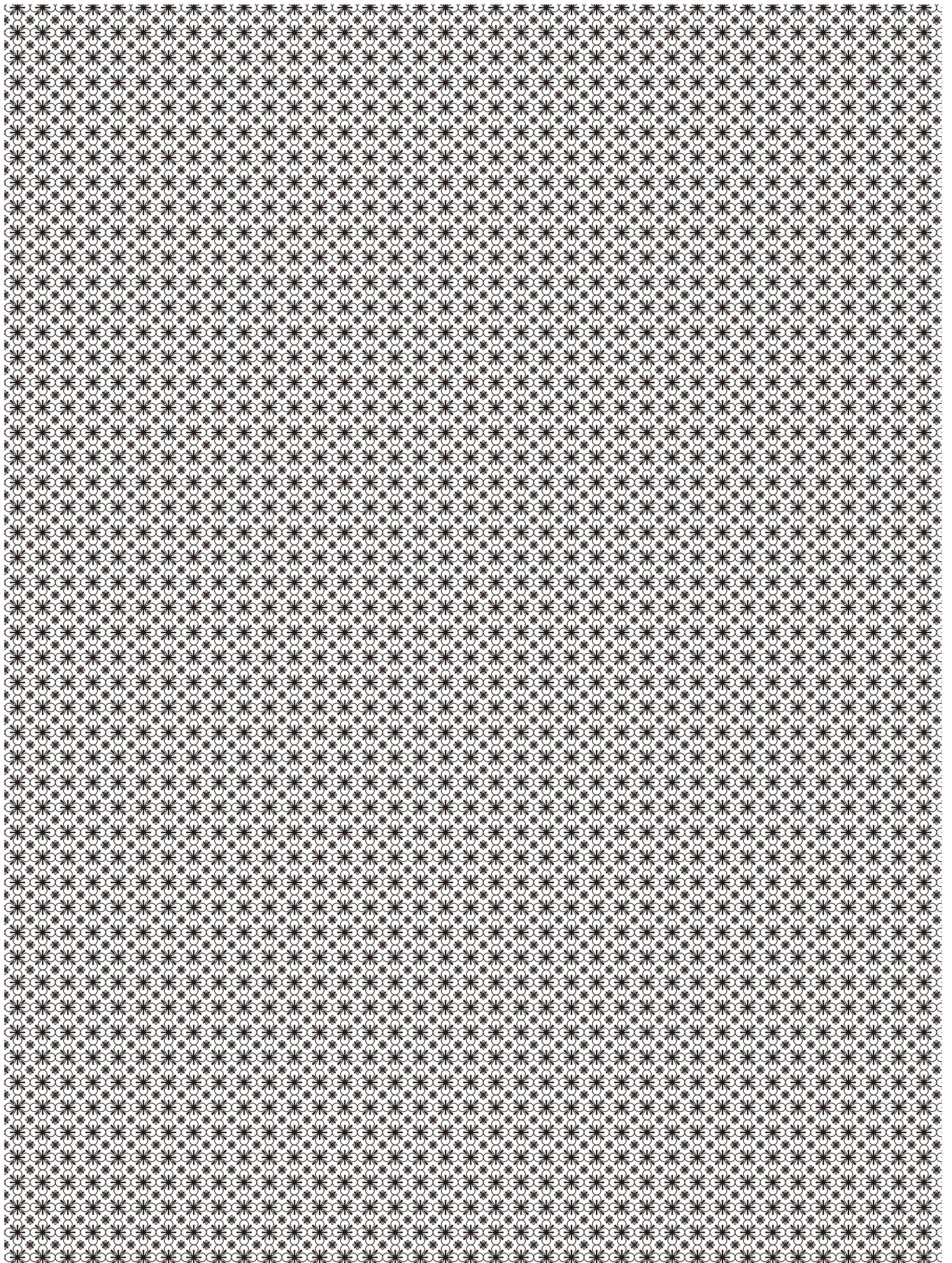


国語



〔問 1〕 例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 同一のカテゴリーに属する概念。

1 範疇ちゆうぶ

2 作品

3 過程

4 商品

5 文脈

〔問 2〕 次の【 】は〃〃内の意味を表す四字熟語である。空欄に入る漢字として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【自□自縛】 〃自分の言行で自分の動きがとれなくなり、苦しむこと。〃

1 条

2 錠

3 縄

4 常

5 乗

〔問 3〕例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 いわずもがなのことを敢えて述べる。

1 言い足りない

2 言うまでもない

3 言い知れぬ

4 言いそびれた

5 言うべきである

〔問 4〕例文の（ ）に当てはまる語句として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 事実に基づかず、明確な起源や根拠のないつくりごとのことを（ ）と言う。

1 反証

2 装飾

3 曲解

4 創造

5 虚構

〔問 5〕 例文の傍線部と同じ漢字を用いるものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 絵に心を奪われていることが意識された瞬間、そうした忘我的なトウスイはかき消えた。

- 1 俳句をトウコウする。
- 2 トウベンを求められる。
- 3 飛行機のトウジヨウ券。
- 4 恩師からクントウを受ける。
- 5 議論がフットウする。

〔問題〕次の文章を読み、後の〔問 6〕～〔問 10〕に答えなさい。

かち、かち、という音がするので見ると、隣の席に座っている女の子が、銀色の小さな機械を押しているのだった。

午後いちばんの授業でお腹はいっぱい、よく晴れていてほかほかとあたたかい五月の陽気、さっぱり理解できない講義内容、という三つがかさなつて、眠さは頂点に達していた。教室のほとんどの学生が、うつらうつらしていた。教授の声が遠くのさざなみのように引いては寄せ、寄せては引いてゆく。

あ、もう眠る、と、気が遠くなりかけた瞬間に、かち、かち、という音は聞こえてきたのである。

じっと見ているあたしに気づいたのだろう、女の子はこちらを振り向いた。

「なあに」

女の子は聞いた。

「いや、その、銀色の」

あたしはどきどきしながら、答えた。

女の子の瞳は、片方が水色だった。そして、もう片方が茶色。

「これ？ カウンター機。ほら、交通調査とかに使う」

女の子は言い、それからすぐに、

「うん。」

とつぶやき、カウンター機をまた一回押した。

かち。

教壇に立っている教授が、ちらりとこちらを見る。

授業が終わってから、あたしと女の子はなんとなく一緒に教室を出た。あたしは、掲示板の方へと歩いていった。休講のお知らせがないかと思つて。

明日の授業は全部、変わりなく平常どおりおこなわれるようだった。

「昔は、大学って、もっとばんばん休講になってたんだって」

という声が隣から聞こえてきて、あたしはびっくりした。あの女の子だった。まだいたのだ。

「そうなんだ」

あたしは慎重に答えた。

「母親が言つた。で、学生も、どんどんさぼつたんだって。あんたは真面目すぎるって、よく言われる」

「そうなんだ」

あたしはあいまいに繰り返した。女の子は、あたりまえのようにあたしの横に立って、これから先もずっと一緒にいるのだというように、親しげにほほえんでいる。

(どうしよう、このままついてきちゃったら)

けれど、女の子はあたしの予想に反して、すぐに、

「じゃ」

と言ひ、あたしに背を向け、すたすたと歩いていってしまつた。途中で、かち、というカウンター機を押す音が、またした。日ざしが強かつた。新緑が、目に痛いようだつた。

次の週と同じ時間、あたしはまた教室で女の子に会つた。

「あつ、こんにちは」

女の子は言ひ、カウンター機を一回かち、と鳴らした。

「それ、何を数えてるの」

あたしが聞くと、女の子は小さく笑つた。何を数えているかについては答えないまま、女の子は反対に聞き返してきた。

「わたし、^{※1}日文の二年生。あなたは」

「^{※2}英文。二年生」

あたしたちは、なんとなくほえみあつた。ほとんど意味のないほえみ。でも、それ以来あたしたちは、授業が終わつた後には、一緒に駅まで歩くようになった。

女の子の名前は、上原菜野^{なの}といつた。

「あなたは」

そう聞かれて、あたしは少しためらつた。

「島島英世」

しましまひでよ。上原菜野は、つぶやいた。

「へんな名前でしょ」

早口で言つと、上原菜野は首をかしげ、

「でも、あたしの、違う色の両方の瞳よりは、へんじゃないよ」と言つた。

その日はじめて、あたしたちはすぐに電車に乗らないで、駅前^aでコーヒーを飲んだ。自動販売機で、あたしは微糖のを、上原菜野はミルクと砂糖がたくさん入つたのを、選んだ。コーヒーを飲みながら、上原菜野は二回カウンター機を押した。

「あのね、これ」

上原菜野は言つた。

「気持ち^aが動いた時に、押すの」

ふうん、と、あたしは答えた。

「今は、どんなふう^aに気持ち^aが動いたの」

そう聞くと、上原菜野は少し考えてから、こう答えた。

「うれしい、と、おいしい」

そのころあたしは、ちょっとややこしい恋愛をしていた。ずっとつきあっていたハルオが、よその子を好きになって、別れたのはいいんだけど、すぐにまた戻ってきてしまった、という状態だったのだ。

ごめん、許してほしい、やりなおしたい。

ハルオは拜むようにして、頼んだ。

あたしは、ふられて、ものすごく傷ついていた。ようやく忘れかけていたところだった。でも、ハルオに拜まれて、あたしは嬉しくなってしまう。よりは戻った。

けれど、ものごとは、そううまくは運ばない。せっかくハルオとつきあっても、前とは何か違ってしまっていた。好き。でも、もどかしい。だけど、好き。

恋愛の相談は、あたしは誰にもしない。

親しい友だちにもしないし、むろん知り合ったばかりの上原菜野にもしなかった。

II だけど、結局あたしは、上原菜野に助けられることになる。

カウンター機方式を、あたしは試してみることにしたのである。

ハルオという時に、どのくらい気持ちが動くか。それを、数えてみることにしたのだ。

びっくりした。

白、五。黒、十八。

それが、ハルオと過ごした五時間のあいだの結果だった。

白は、楽しい方に気持ちが動いた回数。

黒は、いやな感じ方面に気持ちが動いた回数。

あたしは、カウンター機を二つ用意したのだ。

左右の手に一つずつ握りこんで、かち、かち、と、押していった。左手は、白い気持ち。右手は、黒い気持ち。ハルオがいくらなす訊ねても、何を数えているのかは教えてあげなかった。

その夜、カウンター機の数字をじいっと見ながら、あたしはしみじみ思った。

十八回も、いやな気持ちになったんだ。

あんまり黒い気持ちの方が多かったので、げんなりするよりも前に、しんとした感慨深い気持ちになった。

b 「くりや、だめた」

あたしは、声に出して言ってみた。

五対十八。その数字を見た瞬間に、すでにハルオとの付き合いはやめようと思っていたけれど、こうやって声に出してみると、そのことはもう確定的になったような気がした。

あたしは翌日、静かにハルオに言った。別れよ。

うん。ハルオは答えた。そして、さみしそうに、こくりとうなず頷いた。

カウンター機を持っているあたしを見て、上原菜野は（ A ）。

「それって」

上原菜野は言った。

「うん。上原さんの真似して、あたしも数えてみることにしたの」

「でも、二つある」

あたしは、左手の機械に白い気持ち、右手の機械に黒い気持ちを担当させていることを、告げた。上原菜野は、（ B ）。

Ⅲ 島島さんは、真面目なんだね

「えっ、どうして」

「気持ちを、ちゃんと分類しようとするなんて、真面目だよ」

「上原さんは、白黒わけないの」

「うん。だって、いい気持ちがほんとうはいやな気持ちだったり、反対に、いやな気持ちが、後で考えると、楽しい気持ちとつながってたりするから、わたしは、自分の気持ちをちゃんと分類するのが、めんどくさいって思っちゃうんだ」

気持ちを分類するのって、めんどくさい。

上原菜野の言葉に、あたしはちよつとショックを受けた。

「でも、わたしだってやっぱり、島島さんと同じように、真面目なんだね。その証拠に、こうやって律儀に自分の気持ちを数えてるわけだし。なかなか母親の言うようには、不真面目になれないよね、わたしたち世代は」

上原菜野は、なぐさめともぼやくともつかないことを言い、カウンター機を、かち、かち、かち、と押した。

「三回ぶんのカウンターのうちわけ。かわいそう。でもわかる。ちよつとしょんぼり」

上原菜野は、言った。そして、照れたようにほえんだ。

五対十八。

その数を、あたしはその夜もう一度、考えてみた。

ハルオを嫌おうとして、あえて黒い気持ちをどんどんつものらせていったのかな。

いやいや、やっぱりいやな感じ方面の気持ち、ハルオと会っている間に自然にやってきたのは事実だし。

でももしかすると、上原菜野の言うように、いやな感じ方面の気持ちが、実はハルオ大好きっていう気持ちと遠くでつながっているっていう可能性も。

いやいやいや、ハルオってようするに、少しもてるからってすぐに浮気しちゃうような男だよ。

ああ、やっぱりあたしまだ、ハルオが好きみたい。

ばか。

ばかばかばか。

もう、ほんとに、ばか。

あたしの気持ちは、ぐるぐるとまわり、あっちへ行き、こっちへ戻り、裏も表も白も黒もごっちゃになっていった。

なるほど。

あたしは思った。

気持ちちは、分類できない。それなら、カウンター機を二つも持っても、しょうがないんだな。

^dあたしは片方のカウンター機を、机の奥深くにしまった。

ハルオとは、今も時々会う。映画を見たり、カラオケに行ったり、たまには手をつないだりする。

^e「やっぱり、気持ちちって、分類できないね」

あたしは上原菜野に言った。

「ねえ、島島さん」

「なあに」

「島島っていう名字、わたしとっても、好き」

そう言つて、上原菜野はカウンター機を、かち、と鳴らした。

「うれしい」

あたしも答え、カウンター機を、かち、と鳴らした。

後ろの席から、顔見知りの^{※3}中文の女の子が、聞いた。

「それ、何するもの。かち、かち、って、いい音だね」

あたしと上原菜野は、しばらく顔を見合わせていた。

それから、同時に答えた。

「ただの、おまじない」

授業の始まりを告げる鐘が鳴った。あたしと上原菜野は、カウンター機をそれぞれのペンケースにしまった。それから、教科書とノートを、急いでかばんから取り出し、午後いちばんの眠くてわかりにくい授業にそなえた。

(川上弘美『真面目な二人』より(読み易さを考慮し、かな遣い、ふりがな等、原文の一部を変更した箇所がある))

※1 日文…大学の文学部等において、日本文学科等の学科の略称。

※2 英文…大学の文学部等において、英文学科等の学科の略称。

※3 中文…大学の文学部等において、中国文学科等の学科の略称。

〔問 6〕傍線部Ⅰ「そう聞かれて、あたしは少しためらった」のはなぜか。理由として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 自ら名乗った女の子の礼儀正しさにくらべて、先に名乗らなかった自分が情けなかったから。
- 2 今名乗ってしまうと自分の名前を周囲の人に聞かれてしまうのではないかと不安になったから。
- 3 出会ってからずっと女の子のことを不審に感じているので、あまり心を許したくなかったから。
- 4 まだ女の子が本当にこの大学の学生か不明なので、自分の名前は知られたくないと思ったから。
- 5 自分の名前は「へん」だから、言うとき笑われるかもしれないといった恥ずかしさがあったから。

〔問 7〕傍線部Ⅱ「だけど、結局あたしは、上原菜野に助けられることになる」とはどういうことか。説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 複雑でわかりにくくなってしまったハルオとの関係に何らかの区切りをつけなくてはならないと思いつつもどうにもこうにもそのきつかけがつかめていなかったが、さりげない上原菜野の助言により思いのほか円満にハルオに別れを告げることができたということ。
- 2 ちょっとややこしい恋愛に疲れ果てていた「あたし」として、上原菜野という今までの生活環境にはいなかったタイプの新たな友人がこれまでの自分の価値観を大きく変え、ハルオもたくさんいる男の子の一人だという見方をもたらし、彼と距離を置くことができたということ。
- 3 ややこしい恋愛に心を乱されていたが、上原菜野のまねをしてカウンター機を使って彼といる時間の自分の気持ちを数えてみたことで、好きという気持ちやもどかしい気持ちがつながっていきたりすることに気づき、結果的に彼との新しい関係を築いていくことができたということ。
- 4 上原菜野と出会ってからは、もどかしい恋愛関係に違和感を覚えていた「あたし」が自分の気持ちを楽しい方といやな感じ方面にはつきりと分けてカウントするという行為を試し、ようやくもどかしさの原因を探り当て、彼との関係がつきあい始めのように安定したということ。

5 親しい友だちは思っても決して言うてくれなかったけれども、知り合ったばかりの上原菜野が「あたし」とハルオの付き合い方は不自然で「あたし」が無理をしているとはつきりと指摘したことで、もどかしい恋愛に終止符を打つ決意を固めることができたということ。

〔問 8〕傍線部Ⅲ「『島島さんは、真面目なんだね』とあるが、なぜ上原菜野は「あたし」のことを「真面目」だと言ったのか。理由として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 気持ちを分類することはとても難しいことだと実感しているため、真っ直ぐに自分の気持ちに向き合って分類しようとしている「あたし」に誠実さを感じ取ったから。
- 2 気持ちを分類することは許すべからざる行為なのに、それを知らないがゆえに自分の気持ちを分類しようとしている「あたし」に対して怒りの感情が沸き起こってきたから。
- 3 気持ちを分類するには限られた人にしかできない高度な技術が必要であるため、気持ちの分類という困難な仕事に向き合っている「あたし」に尊敬の念を抱いたから。
- 4 気持ちの分類行為は徒労に終わることを早く教えてあげたいが、はっきり言っては角が立つのでまずは褒めることから始めて徐々に本当のことを伝えようとしているから。
- 5 気持ちを分類するなんて自分には思いもよらない発想だったため、内心では「あたし」に先を越されたような気がして焦る気持ちが起こったが、平静さを装ったから。

〔問 9〕空欄A・Bに入る言葉の組み合わせとして、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 A 息をのんだ B 背を向けた
- 2 A 目をまるくした B 首をかしげた
- 3 A 舌を巻いた B 一肌脱いだ
- 4 A へそを曲げた B 耳を疑った
- 5 A 肩をすぼめた B 鼻で笑った

〔問 10〕本文の趣旨に合う説明として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 波線部 a 「その日はじめて、あたしたちはすぐに電車に乗らないで、駅前でコーヒーを飲んだ」とあるが、この文は物語の展開において、二人が同じ講義を受講している仲間という関係から更に親しくなったことを暗示する役割を果たしている。

2 波線部 b 「『こりや、だめだ』」とあるが、この時「あたし」はハルオと一緒の時間にいやな気持ちになる回数が予想以上に多かったことで付き合いをやめようと思っていたが、声に出すことでその気持ちが決まってきたことを感じている。

3 波線部 c 「上原菜野の言葉に、あたしはちよつとショックを受けた」とあるが、その理由は、上原菜野に「めんどくさい」と言われて、気持ちを分類しようとしている自分の考えを否定されたように感じたからである。

4 波線部 d 「あたしは片方のカウンター機を、机の奥深くにしまった」とあるが、その理由は、気持ちを分類できないことが分かり、自分の気持ちをカウントすることに意味を感じなくなり、カウンター機なしでも自分の気持ちの変化に気づこうと思いついたからである。

5 波線部 e 「『やっぱり、気持ちって、分類できないね』」には、ハルオいると好きな気持ちとどこかしい気持ちが混在しているのを感じたが、後で考え直してみると、これらの気持ちが実はつながっているのも実感でき、「気持ちは、分類できない」ことを自分の結論として納得できた心境が端的に表されている。

〔問題〕次の文章を読み、後の〔問 11〕～〔問 15〕に答えなさい。

商品のコマースはストリートです。「自由であれ。(Be Free)」、「あなたらしくあれ。(Be Yourself)」というフレーズは、現代の宣伝において常套句の最たるものです。しかしながら、ある意味で矛盾しているのは、このように呼びかけるコマースが、「あなたらしくあれ。」と言いつつ、そのうえで「うちの会社の商品を買いなさい。」と迫ってくることです。どうやら現代の洗練された市場において、商品化の論理は「自分らしさ」さえも商品にしてしまったようです。いや、むしろ最有力商品と言うべきでしょう。消費者の「自分らしさ」意識を満足させるための商品が、次から次へと生み出されています。とはいえ、それらは綿密な市場調査によって割り出された、類型化された「自分らしさ」にはかなりません。「あなたらしさを演出する、定番アイテム」などという吊り広告を見ると、¹なんともいえない気分になります。

思えば、〈私〉が〈私〉であること、〈私〉らしくあることは、現代において、とても魅力のあることであると同時に、少々つらいことなのかもしれません。私たちは、日々〈私〉らしくあることを求められます。「あなたの個性は何か。」「あなたは他の人とどこが違うのか。」という声が、私たちに投げかけられます。「あなたらしい選択を。」と言われることも日常茶飯事です。「私らしさって言われても、それがなんなのか、もう少し考えてみないと分からない。」なんて、口よんでいる暇はありません。

なぜこんなことになったのでしょうか。

そういう時代になった、としか言えません。

それでは、「そういう時代」とはなんなのでしょう。話が少々飛躍するようですが、「^{※1}近代」という時代について考えてみたいと思います。「近代」の目標の一つは、これまで人々を縛り付けてきた伝統の拘束や人間関係から、個人を解放することでした。過去から続いてきた慣習や社会的関係は、しばしば個人の自由を束縛し、服従を要求してきます。これに対し、「近代」は、個人の自由を重視し、個人の選択を根本原則として、社会の仕組みやルールを作り替えようとしてきました。

一例を挙げれば、伝統的な社会において、「家」の存続こそが、そこに属するメンバーにとつての至上命題でした。これに対し、「近代化」の結果、そのような意味での「家」は解体し、当事者の合意に基づく婚姻によつて生み出される「近代家族」が取って代わりました。夫婦とその子どものみからなる、いわゆる「核家族」化も進みました。その意味では、^{II}与えられた人間関係を、自分で選んだ関係に置き換えていく過程こそが、「近代化」であったと言えます。

そして、今や「^{※2}ソーシャル・スキル」の時代です。人間関係は、一人一人の個人が「スキル(技術)」によつて作り出し、維持していかなければならないとされます。「^{※3}社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)」という言い方もなされるようになりました。今日、人と人とのつながりは、個人にとつての財産であり、資本なのです。逆に言えば、自覚的に関係を作らない限り、人は孤独に陥らざるをえません。^{III}ここには、「伝統的な人間関係の束縛からいかに個人を解放するか。」という、近代の初めの命題は、見る影もありません。時代は変わったのです。

「近代」のもう一つの目標は、宗教からの解放でした。伝統的な社会においては、常に「聖なるもの」の感覚がありました。人間を超えた「聖なるもの」は、人々の畏れるべき対象であると同時に、人々にあるべき姿、進むべき道を示してくれるものでもありました。「近代化」は、この「聖なるもの」の感覚に支えられた宗教から人々を解放し、個人の意志を新たな価値の源泉にしました。人々が選択にあたって指針とするのは、もはや人間を超えたものではありません。人々自身のうちに、あらゆる価値の源が見いだせるというのが、「近代」のスローガンでした。

「聖なるもの」が一つ一つ失われていったのが、「近代」という時代です。ある意味で、〈私〉がこのように強調される現代とは、そのような「近

代」の行き着いた時代なのかもしれません。なぜなら、あらゆる「聖なるもの」が見失われてしまった現代において、価値とされるものは、もはや〈私〉しかないからです。

現代の社会理論家の代表的な一人である^{※4}ジークムント・バウマンは、次のように言います。近代においても、最初の頃には歴史において実現されるべき目標の理念がありました。「公正で平和な社会」などというのが、それです。このような時代においては、そのような社会の理想を実現するための「革命」という言葉には、独特の魅力がありました。しかしながら、現代の社会理論で強調されるのは、むしろ「個人の^{※5}差異」や「個人の選択」です。もはや社会的な理想は力を持たず、もっぱら一人一人の〈私〉の選択こそが強調されるのが、今の時代だと言うのです。つまり、近代という時代も一つの折り返し点に達したということなのでしょう。バウマンは、私たちの生きる近代は、同じ近代でも、〈個人〉や〈私〉中心の近代だと言います。

このような「折り返し点」を過ぎた「近代」のことを、現代ヨーロッパの理論家で、社会学者である^{※6}アンソニー・ギデンズや^{※7}ウルリッヒ・ベックらは、「後期近代」とか「再帰的近代」などと呼んでいます。このような言い方のポイントは、「折り返し点」を過ぎたとしても、「近代」が終わったわけではないし、「近代」を押し進めた運動がストップしたわけではない、ということなのです。つまり、「近代」が終わり、「近代」とは全く別の「脱近代（^{※8}ポストモダン）」が始まったわけではないのです。むしろ、「近代」のプロジェクトが成功し、成功したためにこそ、その効果が自分自身に跳ね返り、「近代」そのものが新たな段階に達しつつある。そのような認識が、「後期近代」とか「再帰的近代」という言い方の背景にあると言えるでしょう（「再帰的」の原語はreflexiveです。文字どおり、自分自身に戻ってくることを意味します）。関連して、「^{※9}成熟社会」という言葉もよく耳にするようになりました。

今や、社会関係は、目の前に当然に存在し、人々を拘束するものというより、一人一人の〈私〉が自覚的に作っていかねばならないものです。人々が物事を決めるにあたって、^{※10}絶対的な価値基準やモデルとすべき人やものはなくなり、全てを〈私〉が決めなければなりません。結果として、現代では「個人」や「平等」といった場合でも、昔とは違った意味合いが強くなっています。「個人」は、それを抑圧するものに対し、高らかに掲げる理念というより、もはやそれしかない、唯一の価値基準という様相が強くなっています。その分、一人一人の〈私〉とは何か、その^{※11}アイデンティティーが問題とされるようになりました。「平等」もまた、全ての人をただ等しく扱うのではなく、一人一人の〈私〉を認め、一人一人の〈私〉が特別な存在であること、いわば「オンリーワン」であることを承認することにほかなりません。今や、人は自分が他人と同じように扱われるだけでは納得できません。自分が他人と同程度には特別な存在として扱われることを求めるのです。

現代において個人主義は〈私〉の個人主義ですし、平等は〈私〉の平等です。価値の唯一の源泉であり、あらゆる社会関係の唯一の起点である〈私〉抜きに、社会を論じることができなくなっています。そのような〈私〉は、一人一人が強い自意識を持ち、自分の固有性にこだわります。しかしながら、そのような一人一人の自意識は、社会全体として見ると、どことなく似通っており、誰一人特別な存在はいません。このようなパラドックスこそが、〈私〉時代を特徴づけるのです。一人一人の個人の〈私〉に着目することなしには、社会の動きを理解することができませんが、さりとてその場合の〈私〉とは、特別なヒーローやヒロインではなく、ごくありふれた存在にすぎません。そのようなありふれた一人一人の個人の〈私〉の中に、社会の激しい変化が見取れるのが、〈私〉時代なのです。

このように、〈私〉が時代の焦点となつていくことが、独特の難しさを生み出していることは間違いありません。例えばデモクラシーです。デモクラシーとは、〈私〉ではなく、〈私たち〉の力によって生み出していくものです。〈私〉のことは〈私〉が決めればよい。しかしながら、世の中には、〈私〉一人の力ではどうにもならないことがあります。人の力を借り、人と協力することで初めて実現できることもあります。一

人の力ではどうにもならない問題がある時、人々が集まって〈私たち〉を形成し、〈私たち〉の意志で〈私たち〉の問題を解決していくことこそ、デモクラシーにほかなりません。

もちろん、〈私たち〉とは誰のことなのか、自明ではありません。問題ごとに、その当事者となる〈私たち〉も違ってくるでしょう。問題の規模が大きくなるにつれ、〈私たち〉のサイズも大きくなります。このサイズが、いわゆる「国」のサイズと一致した時、デモクラシー（民主政治）という言葉は最も頻繁に使われますが、それより大きいサイズでも、あるいはより小さいサイズでも、デモクラシーであることに変わりありません。

ただ、今の時代において、〈私たち〉を形成することは、ますます難しくなっています。あなたは、誰といっしょに〈私たち〉を形成していますか。その〈私たち〉には、誰が入っていて、誰が入っていないのでしょうか。ある意味で、そのこと自体が、極めて重要な政治的意味を持っているのが、現代という時代なのです。

日々、安全保障、環境、エネルギー、水や食資源、不況、雇用、年金や介護の問題など、私たちの身の回りにおける多くの問題が報道されています。これらの問題ごとに、誰が当事者で、誰の力を結集しなければ、問題を解決できないのでしょうか。

一人一人が〈私〉の意識を持ち、他人とは違った自分らしさを模索している中、そのような〈私〉が集まって、〈私たち〉を作っていくかなければならないのです。これこそが〈私〉時代のデモクラシーという問題です。

（宇野重規『〈私〉時代のデモクラシー』より（読み易さを考慮し、かな遣い、ふりがな等、原文の一部を変更した箇所がある））

- ※1 近代：モダン（近代）は、十八世紀頃にヨーロッパに始まった時代。また、その精神と社会の在り方。産業革命を背景に持ち、進歩主義、合理主義、個人主義、ヒューマニズム等を肯定的に捉える点に特徴がある。
- ※2 ソーシャル・スキル：社会生活を営むうえで必要な人間関係を築く技術。
- ※3 社会関係資本：社会の効率性を高める、人間の信頼関係やネットワーク。
- ※4 ジーグムント・バウマン：（一九二五～二〇一七年）ポーランド出身の社会学者。
- ※5 差異：ある物事の、他の物事との違い。「差違」とも。
- ※6 アンソニー・ギデンズ：（一九三八～）イギリスの社会学者。
- ※7 ウルリッヒ・ベック：（一九四四～二〇一五年）ドイツの社会学者。
- ※8 ポストモダン：近代を乗り越えようとする思想運動。脱近代。二十世紀後半に盛んになった思想運動のことで、ポスト・モダニズムとも言う。近代の考え方の限界を指摘し、現代の消費社会や情報社会に対応する新しい知や実践のあり方を提唱する思想である。
- ※9 成熟社会：精神的な豊かさや生活の質の向上を重視する、平和で自由な社会。
- ※10 絶対：他に比較・対立するものがないこと。
- ※11 アイデンティティー：自分が他の誰でもない自分であることについての実感や確信。

〔問 11〕傍線部Ⅰ「なんともいえない気分になります」とあるが、それはなぜか。理由を説明したものととして最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 「自由であること」や「自分らしくあること」は、資本主義の中で買い求められるような世俗的なものではなく、人間の生き方に関わる崇高なものはずだから。

2 「あなたらしさを演出する」という広告のフレーズがあまりに露骨に消費者の購買意欲を刺激しようとするので、強い嫌悪感を覚えるから。

3 「定番」という言葉で表現される類型化された商品によって、個々人で異なるはずの「自分らしさ」が得られるような言い方に矛盾を感じるから。

4 個々人で異なるはずの「自分らしさ」が、「定番」という言葉で類型化された商品によって簡単にもたらされるような言い方に憤りを感じるから。

5 「自分らしさ」を日々要求され、いつも自分らしくあることは精神的にも経済的にもつらいことであり、それが現代の閉塞感の原因のように感じられるから。

〔問 12〕傍線部Ⅱ「与えられた人間関係」とは何を指すか。「与えられた人間関係」の具体例として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 お盆祭りへの不参加を申し出たところ、村の有力者から「参加するかしないかについては各人の判断に任せる」と言われた。

2 村のしきたりを破って周りの住民から不当な扱いを受けたのが納得できなかったので、裁判に訴えたところ勝訴した。

3 自分とは出身の地域も境遇もまったく違う恋人に思い切ってプロポーズをしたところ、見事に受け入れてもらえた。

4 苦勞して就職活動をし、せっかく就いた仕事に専念したので、当分の間は誰かと結婚をするということを考えられない。

5 曾祖父は子供の頃、進学して学問をしたいという思いはあったが、商人に学問は必要ないという父の言に従い商家を継いだ。

〔問 13〕傍線部Ⅲ「時代は変わったのです」とはどういうことか。説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 伝統的な社会では人間関係はもともと持って生まれたものであったが、「近代」においては、個人の努力によって人間関係を変えられるだけでなく、スキルを駆使してその努力自体を楽しもうとする人々が増えてきているということ。

2 「近代」では自由を重視する個人が自分自身の意思で所属する集団を選んで関係を作り替えるようになったが、「現代」では資本主義の更なる発達により、資本がないと人間関係を生み出し維持することが難しくなったということ。

3 「近代」では「家」の存続こそがそこに属するメンバーにとつての至上命題だったが、「現代」では人間関係を作るための「ソーシャル・スキル」が普及し、「家」に関係なくさまざまな人と協力しながら人間関係を構築できるようになったということ。

4 「近代」では個人が自由に人間関係を選べるのが目指されたが、「現代」では人間関係を自ら「ソーシャル・スキル」によって作り出さなければ身寄りがなくなってしまう時代となり、「近代」の目標は跡形もなくなったということ。

5 「近代」は伝統的な人間関係を否定し個人を解放することが目指されたが、「現代」では、個々人が「ソーシャル・スキル」を使いこなせずに疲弊し孤独に陥らざるを得なくなり、再び前近代のような人間関係を取り戻す動きになっているということ。

〔問 14〕傍線部Ⅳ「現代では『個人』や『平等』といった場合でも、昔とは違った意味合いが強くなっています」について、「平等」の概念は、近代と現代とでどのように異なるか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 「近代」においては人々がただ等しく扱われることが求められていたが、「現代」においては、それぞれが他者と同じ程度に特別な存在であることが求められるようになっていく。

2 「近代」においては社会が掲げた理念であった「平等」は実現されなかったが、「現代」においては「平等」の理念が実現され、人と差をつけられることに新たな喜びを感じている。

3 「近代」においては等しく扱われることが求められたが、「現代」においては、等しく扱われることに慣れてしまい、特別なヒーローやヒロインのように扱ってほしいと望んでいる。

4 「近代」においての「平等」は、言葉の上だけのものであり世界中で差別はあったが、「現代」においては「平等」とはなくてはならない全世界共通の理念となっている。

5 「近代」においてはどの人間も結果として等しく扱われる「結果の平等」が求められたが、「現代」においては、あらゆる人が個性を発揮するための「機会の平等」が求められるようになった。

〔問 15〕 傍線部V「このようなパラドックス」について、ここでの「パラドックス」とはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、

次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 現代の人々は個性を発揮することを望んでいながら、個人の平等が強調される社会のため、突出した個性を発揮することのためにためらいを覚えてしまうということ。
- 2 現代の人々は自分が他者と異なる個性を持っていることにこだわる一方で、そうしたこだわりを持っている点は社会全体で類似しているということ。
- 3 現代の人々は、自分こそ個性的な存在として社会貢献したいと思っっているけれども、社会全体から見れば皆ちっぽけな存在にすぎないということ。
- 4 現代の人々は特別なヒーローやヒロインではなくありふれた存在なのにもかかわらず、自分が社会を変えていく価値ある人間だと思いがあっているということ。
- 5 現代の人々は、個性こそ真の人間だという近代化の流れから、皆が個性的になり過ぎてしまいそれぞれが身勝手に行動しているのでまとまらないということ。

